

美術品修復の現場から



吉備国際大学教授  
馬場 秀雄氏

ドイツ・ケルン市の修道院で軸巻を特訓  
復専門大学院の院生だったエルケさんを研修生として預かることになりました。彼女は西洋の紙の勉強と経験を積んでいました。またアメリカ・ワシントンD.Cにある議会図書館・修復部での留学経験もある、優秀な学生でした。6カ月の研修期間でしたが、東洋美術品の修復の基礎技術をよく覚えてドイツに帰る。今回は、私のところで研修を受けた教えるの一人で、現在、ベルン市立図書館修復室に勤務するドイツ人女性、エルケ・メンツェルさんのかかわりを紹介します。



筆者の自宅工房で研修を受けるエルケさん=1998年

か、表装の技術や経験が復家の荒木史さんと、ドイツ・バイエルン州イッパウフェン修道院で研修を受けたエルケさんの院生だった高橋真理さん

## 広がった国際協力

です。しかし、引き受けた以上、修復しなければいけません。そこで、美術品と掛け合いながら、私の手で働いていた修

ん(現在はドイツ歴史博物館勤務)の2人がスイスに向き、エルケさんと3人で無事、長谷川主

がリートベルグ美術館の学芸員で日本美術担当のD.R.カターナ・エツォ



スイスでの長谷川主殿「鷹の図」の修復作業=2000年8月



スイスのベルン総合修復大学で東洋美術品修復の実習講義をする筆者(右)=2001年6月

海外で初の「冠」腰長谷川主殿については、桃山時代に長谷川等伯(1539-1610)の周辺で活躍した絵師さんらでしたが、日本にある長谷川主殿筆「梁塵圖書屏」についての情報などをリポートベルグ美術館にお知らせしました。そのご縁で、1年後の2001年6月にリートベルグ美術館で開催された「長谷川等伯展」に私を招待してくれました。

きび 談話の決定も、こうしていれば何で、日々十年後でも思い返すことができる」と笑顔でした。今、新聞を読む高校生は少ないのが現状です。だからこそ自分やチームの活躍が書かれた記事で新聞に親しんでもらえたいと思います。そのために、私は、切り抜きをたくさん集めて、お話を聞かせていただきます。【横山三加子】



スイスのリートベルグ美術館で開かれた「長谷川等伯展」のパンフレット



NOVARTIS MEDICOPHARMA AG